

李登輝

Lee Teng-hui

著

武士道解題

ノーブレス・オブリージュとは



小学館

内村鑑三と札幌農学校

新渡戸稻造先生と並ぶ同時代の偉大なる日本の精神的指導者・内村鑑三は、後に英語で書き下ろした『日本及び日本人』(Japan and the Japanese)一八九五年刊。邦訳は鈴木範久『代表的日本人』岩波文庫)の中で、自分にキリスト教信仰の受容を可能とさせた五人の大先達を紹介しています。

その先達とは、西郷隆盛、上杉鷹山、二宮尊徳、中江藤樹、日蓮上人です。内村鑑三は、この五人を取り上げながら、素晴らしい「日本の精神的土壤」を深く掘り起こしてみせてくれたのです。この恐るべき慧眼の書を英語で世に問うた内村鑑三は、東京外国语学校(東京英語学校)を経て札幌農学校に進んだ新渡戸稻造と、熱心な「聖書研究」を通じて生涯の友となつた日本のキリスト者のパイオニア的な指導者です。驚くべきことに、世界的な名著である『武士道』(一九〇〇年公刊)に先立つこと五年も前に、早くもこの『日本及び日本人』を世界に提示していたのです。

キリスト教に帰依するまでの内村鑑三が特に深く傾倒していたのは、一言でいえば日本の伝統的価値観を形づくついていた儒教だったのではないでしょうか。そして、そのような日本の伝統的価値観、あるいは儒教的精神を別の言葉で表せば、詰まるところ「武士道」

ということになります。事実、彼自身も、『英和独語集』の中で、次のように述べているのです。

「武士道の台本に基督教を接いだ物、其物は世界最善の産物であつて、之に日本国のみならず全世界を救ふ能力がある」

内村鑑三もまた、新渡戸稻造と同じく、このようにして「武士道」とキリスト教を結びつけ、以後、人一倍熱心な伝道者としての活動を献身的に推し進めていくこととなつたのです。

では、日本近代化の曙光時代に、一高や東大に勝るとも劣らぬ素晴らしい教育を実践した「札幌農学校」とは、いったい如何なる学校であったのでしょうか?

新渡戸稻造研究の第一人者として世界的にも広く知られている花井等博士は、名著『国际人 新渡戸稻造』(広池学園出版部)の中で、黒田清隆やウイリアム・クラークらが精魂を込めて創設した、この「武士道とキリスト教」の驚異的な立場の原点について、次のように述べています。

『明治政府は、北海道の開発を国家的な重要課題と考えていた。乏しい財政の中から、國家予算の一年分に相当する一千万円を投じて開拓事業をはじめている。薩派の代表で、後

に総理大臣になる時の北海道開拓使長官であった黒田清隆は、開拓に資する人材養成を目的として「札幌農学校」を開設した。黒田は、先見性のある政治家であった。米国視察の機会を得た黒田は、この国の拓殖事業が実にはつらつとしているのに深く感動を受け、北海道開拓の手本にしようと考えた。

黒田の渡米は、明治四（一八七一）年一月のことである。米国を手本にしたいと決意した黒田は、駐米公使森有礼のあつせんによつて時の大統領グラントに会い、日本の情勢を伝え、米国から開拓事業の指導者を招聘したいと懇願した。グラントは、農務局長のホーリス・ケプロンを開拓使顧問に推薦した。同年八月、黒田はケプロンを伴つて帰国した。おりしもこの月、北海道開発計画が決定した。それは国家予算の一周年分に相当する一千万円を投じた十カ年にもおよぶ大計画であった。

ケプロンは北海道に渡つて調査を行い、黒田に報告書を提出した。その中でケプロンは「開拓使は科学的、組織的にして、かつ実用的な農業をおこすがために全力を傾注すべきである」と述べ、そのために東京と札幌に連絡して学校を開設することを勧めた。すなわち、札幌農学校開設の必要性を力説したのである。黒田自身も北海道の開発は教育の力によらねばならないと考えていた。

明治五（一八七二）年、黒田は北海道に開拓事業に関する学校を設けるまで、東京で仮

学校をはじめることにした。こうして同年三月、東京芝・増上寺内に「開拓使仮学校」の看板が立てられた。

その後、紆余曲折があつて、北海道に「札幌農学校」が開設されるのは明治八（一八七五）年である。同校で授業がはじめられたのはさらにその翌年である。「一期生の数は、わずか十六名であつた。その中には、稻造が兄のように慕つていた佐藤昌介がいた」

佐藤昌介（一八五六～一九三九年）は花巻出身で北海道開拓の祖と仰がれ、札幌農学校が北海道帝国大学になつたときの初代総長に就任した人です。稻造より六歳年上ですが、「東京外国语学校」以降、稻造は兄のように彼に接し、終生変わらぬ温かい友情で結ばれ続けました。

《明治八（一八七五）年三月、黒田清隆は政府に対し「札幌農学校」にアメリカ人教師三名の招聘を願い出ている。政府はこれを受けて、外務省を通じて時のアメリカ駐在公使吉田清成に適任者の選考を命じた。

なお、招聘にあたつて黒田が希望したのは農学校の教頭を兼務しうる専門の学識経験を持つた博士三名を選ぶことであつた。

吉田公使は、この条件に適う人物の選考に八方手を尽くした。そして、当時のコネチカ

ツト州教育局長B・G・ノースロップの紹介によつて、最上の人物と会うのである。

その人物こそウイリアム・スミス・クラーク (William Smith Clark、一八二六—一八八六年) であつた。クラークは一八二六年にアメリカ・マサチューセッツ州のアッシュフィールドに生まれた。長じてマサチューセッツ州のアマースト大学を卒業。その後、ドイツに留学して学位を取得。一八五二年には母校のアマースト大学の教授となつた。南北戦争では北軍の大佐として活躍した。一八六七年にマサチューセッツ農科大学が設置された際、学長に就任した。

新設大学の学長としてクラークは大いに腕をふるい、理事会や学生たちから高い人望を得た。吉田公使は、人物、識見ともにすぐれたクラークをぜひ札幌農学校に迎えたいと考へて交渉をはじめたのである。しかし、交渉は難航した。クラークは現職の学長であり、しかも学内で評価が高かつたために理事会は許可を出そうとしなかつた。これをおしきつたのは、当のクラークであつた。フロンティア・スピリットに溢れたクラークは、東洋の新興国が進めようとしている一大事業に強く心を動かされた。これぞわが仕事だと思ったのだ。クラークはこの申し出に異常なほど熱意を表明し、彼自らも理事会の説明にあつた。その結果、ついに理事会は折れて、現職の学長のまま一年間日本へ赴く、という異例の契約が調印されたのである》

『クラークは道徳教育と人格の陶冶^{トーワ}に力を注^じうとしていた。その一端は、開校直後の訓辞に表われている。当時、日本の学校は細かな規則を設けて生徒の一挙手一投足を縛ろうとする弊があつた。他律の教育觀である。「札幌農学校」の前身の「札幌学校」もその方針であつた。しかし、クラークはこうした教育觀とまつこうから対立する。彼の信念は自律の教育觀であつた。彼は生徒たちの良心ある行動を信じた。他から命じられて何かをする。あるいは他から強制されて正しい行動をするようでは独立した人格たりえないとした。自らの良心に従い、自發的に責任ある行動をとるようではなくては「近代人」とはいえない。「札幌農学校の生徒たちにはそのような人間になつてほしい」という期待が、クラークにはあつた。したがつて、彼は生徒たちが覚えきれないようたくさんの方針をいつさい廃し、ただ一言、

“Be gentleman.”

と、述べただけだった。

当時としては画期的な校則だった。

このクラークの発言は、生徒たちを感動させた。彼らも全幅の信頼を寄せるクラークに応えていこうと決心したのだ。「私たちは、ジエントルマンとして俯仰^{おさかずか}天地に恥じない行いをしなければならない」と、固く心に決め、自らの行動を律していくた